

2015年度卒業論文

2015年度 卒業論文

〈音楽の力〉の可能性

慶應義塾大学法学部政治学科

(学責番号：31257675)

田代 静

2015年3月31日

目次

第一章. はじめに

第二章. 〈音楽の力〉とは何か

2-1. 音楽を行為と捉えなおす

2-2-1. 音楽の意味とは

2-2-2. 音楽コミュニケーションとは—フィティッシュ・コミュニケーション

2-3. 〈音楽の力〉の可能性

第三章. 実践—塩原ゼミでのワークショップの実践

3-1. ワークショップ概要

3-2. ワークショップの考察

3-3. ワークショップの反省

3-4. 塩ゼミソング

第四章. おわりに

参考文献・ホームページ

第一章. はじめに

〈音楽の力〉とはなんだろうか。筆者(以下、私)は、4歳の頃にバイオリンとピアノを習い始め、これまでの18年間の生活の中心には常に音楽があった。〈音楽の力〉という言葉を目にする機会は数えきれないほどあったが、その正体はいつも漠然としていた。音楽は、平和を祈る文脈で語られることもあれば、ナチス時代のワーグナー音楽のように、プロパガンダとして政治的に利用されることもある。また、2011年3月11日に起きた東日本大震災の後には、NHK復興支援ソング「花は咲く¹⁾」が日本中に拡がり、歌われたり演奏されたりしたように、人々が悲しみを分かち合ったり、人々を勇気づける偉大な存在として音楽が語られることが多くなった。特に、宗教的権威を背景に生まれたクラシック音楽は、「メロディー・リズム・ハーモニー」の三要素で構成される音楽作品に本質的に謎めいた「力」が内包されると信じられることが多い。現代でもモーツァルトの作品を聞くと頭が良くなるといった「モーツァルト効果」が話題となったり、動画共有サイト YouTube に数々の「癒しのクラシック特集」「快眠用クラシック」等といった動画が多く配信されたりしていることはその名残だろう。

様々な文脈で語られる〈音楽の力〉だが、これまでの音楽学や音楽療法の分野などでは、作品自体に焦点が当てられ語られることが多かった。音楽作品が神秘的な魔力を持つことは自明のものとして、その魔力の正体は棚上げされてきたのである。

この伝統的な本質主義の音楽観に異議を唱えたクリストファー・スモールは以下のよう

この問い—実際には「音楽の意味とは何か?」と「人間の生における音楽の機能とは何か?」という二つ問いなのだが—について、満足な答えが与えられたためしがない。(中略) なぜなら、この世に音楽などというモノはないのだから²⁾。

スモールは、この世に音楽というモノはないと述べ、音楽の本質的に存在する「モノ性 thingness」を強く否定した。彼は、音楽をモノではなく行為や活動として捉えなおし、『ミュージッキング』という概念を提唱した。音楽を構築主義的に捉えなおそうとしたこの議論は、今日でも頻繁に参照され評価されており、「音楽」を追求してき私にとっても大変刺激的な言葉である。

¹⁾「明日へ」復興支援ソングのご案内 <http://www.nhk.or.jp/ashita/themesong/> (2015年12月22日アクセス)

²⁾クリストファー・スモール/野澤豊一、西島千尋訳、2011年、『ミュージッキング—音楽は行為である』水声社 19頁

音楽をモノではなく「ミュージッキング」と捉え直すと、音楽の社会的な側面が浮き彫りになり、〈音楽の力〉が他者とのコミュニケーションの中で生じる可能性が見えてくる。この議論を元に私のこれまでの音楽活動を振り返ると、音楽は、コミュニティの関係を深化する「力」を持っているという仮説が立つ。私の経験を一つ挙げておこう。私の故郷、福井県の、とある村の小さな寺で開かれた秋の音楽祭に参加したことがある。8年くらい前のことだと思う。その寺の近くに住んでいる方々が集い、月夜の下でハーブやピアノで奏でられる音楽に静かに耳を傾けていた。そして演奏会が終わると、皆一同に甘酒や豚汁を手に取り、演奏会の感想を語り合ったり、次の村の行事の企画をしたりしていた。しばらくすると、皆でピアノ伴奏に乗って童謡『ふるさと』を歌い、満足気な表情をしながらの解散となった。帰り際に「〇〇さん、明日はよろしくね。」「お仕事頑張ってくださいね」などと互いに声を掛け合っていた。この小さなお寺を囲むコミュニティはなんて暖かいのだろう、と子どもながらに感動した覚えがある。このとき、このコミュニティに影響を与えたのは、ハーブやピアノの奏でた音楽そのモノというより、その音楽を聴きに行き時間を共有する、という行為だと考えられる。秋の音楽祭という「ミュージッキング」によって生じた〈音楽の力〉が、このコミュニティの関係を深化させたのだと思う。

本論文の目的は、ミュージッキングが、既に存在するコミュニティの共同主観的な領域に影響を与えるのかを、実践を通して考察することである。〈音楽の力〉の正体の一端を掴めれば幸いである。

第二章. 〈音楽の力〉とはなにか

2-1. 音楽を行為と捉えなおす

私は、競争の激しい音楽界で、音楽は正しく演奏されなければならないモノだと教えられてきた。コンクールや発表会では、楽譜を間違えずに演奏することが最低条件とされ、その上で音楽性が評価された。私は、正しい音楽などというものが存在するとは到底思えず、「音楽」という言葉を窮屈に感じていた。しかし、音楽を行為と捉えると「音楽」という言葉はとても開かれたものだと考えられる。スモールは、音楽の本質主義的な音楽観から、音楽に関わる人間の行為や活動の中に音楽の意味を求めた。『ミュージッキング』(=音楽する)とは、どんな立場であれ音楽的なパフォーマンスに参加することであり、これには演奏する事も聴くことも、リハーサルや練習も、パフォーマンスのための素材を提供すること(つまり作曲)も、ダンスも含まれる³。音楽の関わり方は多様

³ 前掲 クリストファー・スモール、46 頁

であり、正解はない。誰しもが音楽をすることができるのである。また、スモールは音楽の儀式的側面についても述べており、音楽はコミュニティーの価値観を「探求」し、「確認」し、「祝い」合う機能をもつと指摘した。「探求」とは、そこでおこなわれている「パフォーマンス以外の世界にまで広がる関係のなかに実際に棲み込むことなしに、その世界を経験する」機会を得ること、「確認」とは、パフォーマンスに関わった人たちが「これが私たちの価値観、私たちの理想とする関係なのだ」、「これが私たちなのだ」と改めて認識すること、また「祝い」とは、「音楽パフォーマンスは自らと自らの価値観を、心地よいものと思わせてくれる」ことを通じ、私たち自身の存在を肯定し、祝福することを意味する⁴。例えば、今も昔も塾員や塾生に親しまれている慶應義塾大学応援歌『若き血』などというものは、まさしくこの儀式的側面が強いだろう。喜ぶべきことが起きると、肩を組んで『若き血』を歌うことで自分達は「慶應コミュニティーに所属しているのだ」という帰属意識を「探求」し「確認」し「祝い」合うのである。この儀式的側面の成立には、『若き血』の和声進行や作曲背景などは大して重要ではない。一連の儀式的行為を繰り返すことで、その価値観が内面化され、ようやく人々は「若き血」に意味を見出し、認識するのである。私が、音楽がコミュニティーの関係性を深化させ得ると考える理由は、この儀式的側面にある。音楽を行為と捉えることで、コミュニティーにおける多様な立場の人々が多様な手段で音楽に関わることで、その音楽の意味が人々の間に生じ、それを共有することができる。共通の意味を持ったコミュニティーの関係性は深化すると考えるのである。このことをより理解するために、人々の間で生じる「音楽の意味」とは、一体どのようなものか。また、なぜ音楽を通して、思いを共有することができるか考えてみたい。

2-2-1. 音楽の意味とは

音楽の持つ意味を見いだそうという試みは、音楽学者や音楽家、音楽批評家の間で何度も繰り返されてきたが、その対象は殆ど特権化された西洋クラシック音楽に限られている。近年になり、アメリカを代表する民族音楽者のブルーノが、従来の音楽を「西洋音楽と非西洋音楽」や「伝統音楽、ポピュラー音楽、現代音楽」などと区別する考えを否定した⁵ように、民族音楽学や音楽社会学の分野で西洋ポップスや民族特有の音楽を対象とした研究も進んできたが、音楽の本質およびその考えうるあらゆる意味は、音楽

⁴ 同上書 クリストファー・スモール 344 頁

⁵ ブルーノ・ネトル/細川周平訳, 1989 年, 『世界音楽の時代』 勁草書房. 第一版第一刷 発行 4 頁

作品と呼ばれるモノの中に見いだされる⁶、という自明視の上で展開されてきた。中村美亜は著書『音楽をひらく』⁷の中で、音楽の意味とは何かという問いに対する3つのアプローチを整理した。1つ目は本質主義的アプローチ、2つ目は機能主義的アプローチ、3つ目はコト的アプローチである。1つ目は、音楽そのものに意味が備わっているとするもの、2つ目は社会的機能から還元して意味を導き出そうとするもので、音楽社会学に多くみられる。そして3つ目のアプローチは、本論文でも扱うアプローチであるが、音楽の歴史的・構造的特質に配慮しつつ、それがどのような意味を持つものとして現れるかを探るものである⁸。つまり、その音楽を構築主義的観点から探るアプローチで、ある文化やコミュニティを組織する人間が、その音楽をどのように認識するのかを明らかにすることが重要とされる。先に述べた、スモールが提唱した「ミュージッキング」という概念はコト的アプローチの一種である。しかし中村は、スモールの議論を、音楽の行為としての側面に光をあて、現代の人間が音楽に携わる意義を積極的に再評価した言葉として重要である⁹、と評価しつつも、音楽のパフォーマティヴ性を見逃し、どこでも同じ意味をもたらすという誤った結論を導き出している、と議論の不完全性を指摘した。この「パフォーマティヴ性」は音楽に意味をもたらす秘密だろう。「パフォーマティヴ」とは行為の遂行を意味している概念で、行為には反復によって意味を固定化する側面と、反復によってずれや差異を生み出すという側面の二つが同時に備わっていることを含意している¹⁰。この「パフォーマティヴィティ」という概念はジェンダー理論の中で広まった概念で、ジェンダーは属性ではなく、自分たちが能動的に選択して構築する行為であるということである¹¹。個人のジェンダーは生まれた時から固定化されたものではなく、行為の遂行の中で内面化されていくものであるという構築主義的な考え方であるが、音楽においても同様である。音楽の持つ意味は内面的に固定化されたものではなく、経験的に創り上げられる。同じ音楽でも文脈によって異なる意味を生み出し、その経験の蓄積が自身の考える「意味」として内面化されるのである。ここでも私の実体験を挙げたい。私はこれまで、クリスマスに何度もクリスマスソングを演奏してきた。子ども向けに演奏したり、学校のクリスマス会で演奏したり、様々なシチュエ

⁶ 前掲 クリストファー・スモール 22 頁

⁷中村美亜,2013 年,『音楽をひらく—アート・ケア・文化のトリロジー』水声社

⁸ 同上書 43 頁

⁹ 同上書 72 頁

¹⁰ 同上書 59 頁

¹¹ 中村桃子,2002 年,第 2 回年次大会基調講演

学会誌第 3 号『言語とジェンダー研究』

http://www.gender.jp/journal/no3/No3_1.html#A00 (2015 年 12 月 29 日アクセス)

ーションがあったが、「クリスマスソング」であることに特に意味の変化を感じたことはなかった。しかし、2015年に某病院の患者さんにクリスマスソングを届ける「サント企画」というものに参加した際に、同じ音楽でも明らかに異なる意味を持つことを痛感したのである。それは、ある個室で入院しているおばあちゃんの前でジングルベルを演奏した時のことであった。演奏直前に担当の看護婦さんに「この方にとって最後のクリスマスであり、耳にする最後の音楽となると思います。」と言われたのだ。この瞬間、私の中でジングルベルの持つ意味が大きく変わった。とても切ない、哀しい曲に思えたのである。演奏中も「おばあちゃん、聞こえる？バイオリンを弾いてくれているよ。嬉しいクリスマスプレゼントだね。」と、おばあちゃんに声をかけるご家族の方々の言葉に胸を打たれていた。心をこめて一生懸命演奏した後には、ジングルベルは、ただの「クリスマスソング」ではなく、あのおばあちゃんと同じ時間を共有した、暖かく優しい曲になったのである。これは、コンテキストによって音楽の持つ意味が変わることを痛感した私の実体験だ。当たり前のことのように思えるかもしれないが、音楽を扱う学問の中でこのパフォーマンス性が論じられることは少ない。だが、聞き手や時間、場所などが同じことは絶対にないので、音楽は毎回必ず異なる意味を持つ。パフォーマンス性を持つからこそ、人々は聞き手や時間、場所などの制約なく、自由に聞いたり演奏したりと、音楽に携わることができ、その時々の意味を見出すことが出来るのだ。先に述べたように、パフォーマンス性とは、反復によって意味を固定化する側面と、反復によってずれや差異を生み出すという側面の二つが同時に備わっている。クリスマスを彩るものとして意味付けられてきた「クリスマスソング」が、私にとっては、儂い冬の曲へと意味を変容させた。しかし、その場にいたご家族には死を意味する暗い曲になったかもしれないし、おばあちゃんにとってはやはりただのクリスマスを彩る音楽かもしれない。音楽行為を通じて形成される意味は、人によって差が生まれる可能性が大いにある。「音楽の感じ方はそれぞれ」である。

音楽の意味はパフォーマンス性である。人々の主観とコンテキストによって徐々に内面化されていくため、その意味がどこへ向かうかは分からない。だからこそ、過去には政治的なプロパガンダのような意味を生み出すことがあったのだろう。しかし、うまく利用すれば人々やコミュニティに共通する大きな意味が生まれるだろう。このどこに向かうか分からないものが、音楽の意味である。

2-2-2. 音楽コミュニケーションとは—フィティッシュ・コミュニケーション

なぜ人々が音楽を通して、思いを共有することができるのだろうか。この節背は、音楽コミュニケーションが人々の間でいかに機能するか検討したい。音楽コミュニケーション

ョンに関する議論は様々なアプローチから展開されてきた。かつて音楽学では「送り手から受け手に伝えられる」という一方向のコミュニケーションと理解されており、作者の意図は、そのまま聴衆に伝わるとされていた。だからこそ、作者の意図(=正しい音楽)を表現することが良いことだとされているのだろう。これに対して、中村が展開した音楽のフェティッシュ・コミュニケーションや、それによって生じる共感性の議論は非常に興味深い。中村はフェティシズムの理論を精神分析の分野から持ち出し、音楽コミュニケーションを捉え直した。

性的な欲望を呈すはずのないモノ(商品)や身体の部位(のイメージ)に対して性的欲望の対象をもつこと、すなわち真実を誤認し、本来あるべきものの不在を代替物で補う代償的な行為をとることがフェティシズムの基本である。しかし、精神分析の立場では、フェティシズムにおいて誤認された「真実」(つまり、本来あるべきもの)はもともと存在しなかったと考える。(中略) フェティシズムは、錯による真実の誤認というよりも、本来あるべきものが存在しなかったことを隠蔽するために生じる、やむにやまれぬ代償行為と捉え直される。¹²

この精神分析の立場から捉えたフェティシズム理論の理論的フレームを、中村は音楽コミュニケーションに応用した。音楽実践における送り手の「思い」は不可避免的に不在であることをフレームに当てはめて以下のように指摘する。

音楽は、人間のある「思い」X(意図や無意識の表現欲求)から生まれる。しかし、それが実際に音楽Yとして表現された時点で、そこには既にXは不在で、その「痕跡」しか残されない。しかし、音楽Yには何かあるはずだと不在を否認し、そこにあるはずの何かを探し続けることから、私たちはZという意味を発見することができる。XとZは別のところから生じるため、まったく異なるかもしれないが、近似のものかもしれない¹³。

このように、私たちは音楽に「思い」が存在するはずと誤認し、しかも、その誤認の真実を隠蔽するために、代替物(=意味)を探し続ける。私自身も、演奏家として作曲家の意図を忠実に表現しようと奮闘した経験は何度もある。作曲者の意図を正確に解釈し発

¹²前掲 中村美亜 189 頁

¹³同上書 中村美亜 191 頁

信することは出来るはずがないのだと思うと残念な気もする。しかし、音楽における「思い」の不在を認識することは、音楽実践を無意味なものとするわけではないだろう。中村は、このことを共同主観的な領域を生み出す契機と捉える。音楽に「思い」が不在だからこそ、取り違えが可能であり、そこに向かって双方の欲望の投影(双方向的なコミュニケーション)が可能となるという。

音楽のコミュニケーションは、音楽へと向かう能動的な行為を通じて現れ出た共同主観的な領域においてはじめて、双方の欲望が投影される場を獲得し、そこにおいて若干の思い違いを抱えつつも、双方が同じ者を欲望しているという確信(= 一体感)を得ることを可能にする。このように、音楽をするという行為は、本質的に祈りの行為と言えるのである¹⁴。

音楽をしていると、通じ合えたと思う瞬間がよくある。即興アンサンブルを楽しむ時だけでなく、オーケストラや室内楽で既存の楽曲を演奏している最中や、何かのコンサートを聴きに行くときにも感じるができる。この感情の正体は、単純に言えばアンサンブルが上手く成立している状態であったり、自分が好む音楽が展開されている演奏なのかもしれないが、本質的には「他者と時間を共有している」と強く感じられることを意味しているのだと思う。正しい音楽が無いからこそ、人々は同時に音楽に没頭し各々の欲望を投影することができる。各々の欲望を能動的に投影した時間が、音楽として成立する。それは自己の欲望に基づいているので、共感を生むことができ、通じ合えた気がするのだ。音楽コミュニケーションは、人々の間に共感を生み出す力を持つのだ。

2-3. 音楽の可能性

ここまで、音楽を行為と捉え直し、能動的に音楽コミュニケーションを行うことで、人間同士の間で新たな意味を生み出し、共感を生み出し得ること、またそのメカニズムを議論してきた。ここで、〈音楽の力〉を再度検討したい。私は、音楽がコミュニティーの関係を深化する「力」を持っているという仮説を最初に述べた。コミュニティーの持つ共同主観的な領域を広げ、共感性を高める力を持つと考えるのである。

中村は、音楽におけるコミュニケーションを考える端緒として、音楽療法や音楽とケアについて議論した。医療社会学者の野口裕二の議論を引用しながら、相互行為としてケアを捉えることの重要性と、クローズアップされる〈語り〉の可能性に言及した。ケ

¹⁴前掲 中村美亜 194 頁

アは、パターンナスティックな関係だけではなく、「他者の存在を認め、他者を力づけると同時に、自分の存在を確認し、自分の生きる力を支えるという関係性を育みこと」が重要である。これを実践するのに、メンバーが帰属意識をもち、相互扶助の意識が働いているコミュニティは格好の場所である¹⁵。「人間は世界を〈語り〉によって組織化し、それを理解する。より丁寧に言うなら、人間は未文節で意味も宿ってない世界を、〈語り〉を通じて分節化し、意味のあるものとして理解するのである。…したがって、〈語り〉が変われば、自分と世界の関係は再組織化される。¹⁶」また、この自分と世界の間を再組織化する〈語りなおし〉は、生きる力となり得るという。

このことは、音楽においても当てはまる。相互行為としての音楽は新しい意味を生み出すことができる。言語ではなくとも、各々の感情を投影させ共感を生み出すことができる。これは〈語りなおし〉として機能し、生きる力となるだろう。これは〈音楽の力〉といえる。だとすれば、音楽は、メンバーが帰属意識を持つコミュニティにとって、生きる力の一助ともなり得るはずである。ここで言う生きる力というのは、共感によって生じる安心感であったり、帰属意識の強化によって出来る絆であったりを意味する。まさしく、音楽はコミュニティの関係を深化する「力」を持っている。

次章では、これを明らかにすべく、通常音楽とは関わりのない既存のコミュニティで、音楽を創るという音楽行為を一緒に行うワークショップを実践して考察を得たいと思う。

第三章. 実践—塩原良和研究会でのワークショップの実践

3-1 ワークショップ概要

私は、通常音楽とか関わりのない既存のコミュニティである、塩原良和研究会(以下、塩原ゼミ)の7期生を対象に、以下のワークショップを開催した。

「みんなで創ろう、塩ゼミソング♪」

日時：2015年10月13日(火)4限

持ち物：

- ・音の鳴るもの(各種楽器/バケツ/手拍子/リコーダー/ワイングラス等)
- ・塩原ゼミでの思い出

服装自由・参加自由

¹⁵ 前掲 中村美亜, 68 頁

¹⁶ 同上書 中村美亜, 69 頁

内容：これまでの塩ゼミでの活動を振り返り、塩ゼミソングを全員で創ります。

このワークショップは、音楽を一緒に創る行為を通して、コミュニティを語りなおし、共感性を高めることを目的としている。

2015年10月13日の4限の1時間半で行った。参加者は塩原ゼミのゼミ生9人と塩原先生だった。事前には、塩ゼミのソングを創るということだけを伝えており、目的や狙い等は伝えていない。

時間になり、ワークショップがはじまった。広い教室の前の方でかたまり、円になって座った。参加者へ協力のお礼を伝えた後に、通常のゼミモードから音楽モードに切り替える為に、アイスブレイクとして2つのリズム遊びをした。

まず初めに行ったのは、リズムしりとりである。それぞれの持ち時間(8拍分)のうち、前半の4拍分は自分の前の人が後半の4拍分で叩いたリズムを叩き、後半は自分の好きなリズムで4拍分叩く。それを順番に繰り返していくというシンプルな遊びである。ルール確認に少々時間がかかってしまったが、何周かするうちにコツを掴んだのかテンポがあがっていったのが印象的だった。

次に行ったのは、「ケチャ風お茶づけ」である。これは、山田俊之さんが作曲したボディパーカッションである。山田俊之さん自身が、子ども達が生き生きと活動できるクラス作りの一環として取り入れたもので、手拍子、足踏み、おなかなどを叩くリズム活動を「ボディパーカッション」と名付けたのも彼である。10人を4グループに分け、それぞれに与えられたリズムと言葉(ケチャ・お茶づけ・ぱらぱらなど)を順番に奏でるものである。一体感を味わえる、アイスブレイクだったと思う。

場が暖まったところでもう一度円になって座った。音楽に苦手意識があるかどうか、という質問をすると半数以上が苦手だと答えた。理由は、「過去に上手くピアノが弾けなかったから」などと、音楽の技術的なものへの苦手意識ばかりであった。そんな音楽への苦手意識を持っている人が音楽創りに参加できるように、手拍子も音楽と捉え得ること、全ての人が音楽をすることが出来ることを伝え、参加者みんなこれから「音楽をする」ということを再確認した。そうして、塩ゼミソング創りがはじまった。

① 語り合い TIME

今回のワークショップでは、既存のコミュニティを語りなおすことが大切であるため、

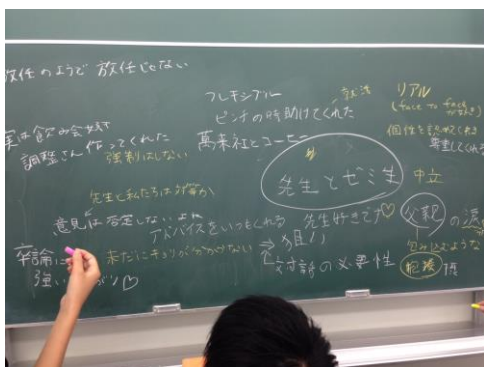
先に塩原ゼミでの2年間の活動を振り返り、文字通り語り合いながら歌詞となるキーワードを出し合うことにした。10人を3つのグループに分け、こちらで提案した塩原ゼミらしいテーマ3つのうち、それぞれ一つずつ話してもらった。テーマは『フィールドワーク』『多文化共生』『塩原先生とゼミ生』である。『フィールドワーク』と『多文化共生』のグループは、模造紙に書き起しながら、『塩原先生とゼミ生』のグループは黒板を使って話し合っていた。

▷フィールドワークチーム



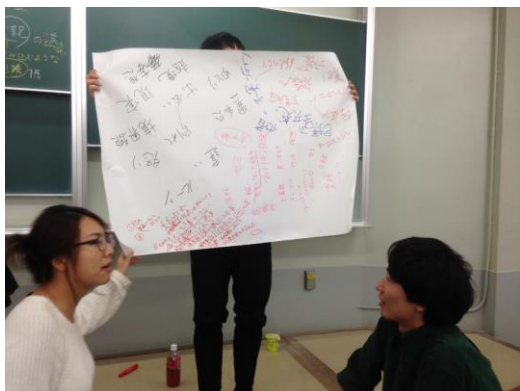
話題の中心は、毎週土曜日に鶴見のラウンジで行うフィールドワークについてである。このフィールドワークでは、外国にルーツを持つ中高生と、遊んだり勉強のサポートをしたりして共に時間を過ごしながらか居場所作りをしている。活動内容であったり、活動前後のゼミ生同士の時間であったり、そこから得た学びについて語り合い、キーワードを挙げていた。

▷塩原先生とゼミ生



話題の中心は、学生目線の先生の印象である。2年間で得た先生の印象や、先生との思い出を語り合い、文字にしていた。フィールドワークチームと比較すると、長めの文章が多い。

▷多文化共生



このグループは、ゼミ生3人と先生の4人だった。2年間通して学んできた「多文化共生」というゼミの軸とも言えるテーマについて、思いつくキーワードやゼミ生自身が感じた葛藤、学びの過程でのゼミ生同士の思い出などを語り合っていた。彼らはこの段階で、音楽にすることを意識して歌詞にまとめていた。その歌詞は以下の通りである。

【多文化共生】

さあ、輪になって話そう
違いを理解したくて何度も 君と対話した
君の気持ちを想像したこちんだ¹⁷の涙
それでも現実はきびしくて
でも共に生きていきたい
君と僕との境界線を越えてあいに行くよ
そこがぼくらの居場所になる
さあ、輪になって話そう

② 音創り TIME

3グループで語り合った内容を共有した後、再びグループに戻り、語り合い TIME で書き出したキーワードに音楽をつけてもらう。どの楽器を使ってもいいので、5つ程度のキーワードを選んで音をつけるようにと指示をした。キーワードにそこから連想する音をつけて、音素材を創ってもらうイメージで、その音の素材を後ほど私が持ち帰って一つにまとめる予定であった。それ以上の音の付け方に指示はせず、様子を見ていた。

¹⁷ 某塩原ゼミ7期生の通称である。

すると、想像以上にどのチームも曲に仕上げようと試みてくれたのである。そのプロセスはそれぞれ異なっていたが、どのチームも共通して、既存のあるメロディーにキーワードを当てはめて、替え歌にする手法をとっかかりに使っていた。

▷フィールドワーク

鶴見のよる教室が毎週土曜日の5時から行われるため、その「5時」というキーワードをきっかけに、鈴木雅之の『今日も渋谷で5時』¹⁸のサビ部分の替え歌を創っていた。出来上がった歌詞からは、鶴見で5時に始まった活動が、鶴見だけに留まらず、山田¹⁹家や磯子など場所を変え、また時間も変えて活動してきたことが分かる。活動するゼミ生同士のやりとりも垣間見え、フィールドワークに関する思い出が沢山つまっていると、私は思う。その歌詞は以下の通りである。

【フィールドワーク】

今日も 鶴見で 5時 みんなでトランプ
今日は 山田家に 10時 肉焼過ぎた oh BBQ

今日は 磯子に 9時 高校説明会
今日は 磯子に 9時 りんちゃん来ない Oh NEBOU

今日も 鶴見で 8時 夕飯どうする？
今日も おぼん de ごはん でもちょっと飽きる たまにはラケル～

▷塩原先生とゼミ生

彼らは、語り合い TIME で書き出した1つ1つの言葉が長いため、ラップにすることに決めた。FUNKY MONKEY BABYS のラップの部分のようである。出来上がった歌詞には、ゼミの活動中だけでなく、就職活動の時期や、飲み会など、様々な先生とゼミ生の思い出がつまっている。また、ゼミ生が先生に対して抱いている印象や、先生の口癖が埋め込まれており、親近感のある歌詞だと、私は思う。その歌詞は以下の通りである。

【塩原先生とゼミ生】

¹⁸ 1993年9月発売、鈴木雅之の6thアルバム「Perfume」の収録曲。1996年2月1日には、鈴木雅之&菊池桃子 デュエットシングル「渋谷で5時」がリリースされた。
¹⁹ 某よる教室参加生である。

距離が分からないや
それが先生の狙いなんや
ある日 塩原さん 調整さん
飲み代は先生が精算
しかし二次会せず解散
だって先生はお父さん
ピンチのときは萬來舎 行かなきゃ
ぼくの口からは言えませんね

▷多文化共生

このグループは、語り合い **TIME** で創った歌詞にメロディーを歌いながら決めていた。ギターを持った **J** がコード進行も創りながら行っていたため、オリジナル要素が強い。「さあ、輪になって話そう」という部分は何度も何度も繰り返され、塩原ゼミが輪になって語り合う風土を持っていることが伝わってくる。「対話」という塩原ゼミで大事にしてきた価値観が、しっかりと込められた歌詞であると思う。

最後に、各グループの創ったメロディーを録画した後、塩原ゼミで2年間共に過ごしてきた7期生だからこそ出来た作品だということを告げ、このワークショップは終わった。

3-2 ワークショップの考察

このワークショップは、音楽と一緒に創る行為を通して、コミュニティを語りなおし、共感性を高めることを目的としている。その成果は出たのだろうか。

まず、音楽を行為と捉えなおすと、今回の参加者全員は音楽をしていたと言える。音楽への苦手意識など無関係に、塩ゼミソングを創るという音楽的行為に全員が能動的に参加することができた。

次に、この曲創りを通して塩原ゼミで過ごしてきて感じていたことを改めて語りなおすことができただろう。ワークショップ後のアンケートで、歌詞創りを通しての感想を聞いたところ、「ゼミのことを振り返れたのが良かった。自分たちのゼミのキーワードが入っているので曲を聴くたびに思い出せて、じわる。(ママ)」「塩ゼミに関してのみんなの思いが詰まってる面白い歌詞だと思う。」という、回答があがってきた。これまで、言葉にしていなかった想いを自分達の言葉することができたようである。

また、塩ゼミソング創り全体を通しての感想をきいたところ、「塩ゼミなら誰でも思っている共通認識を改めて、音楽を通して共有できるのはとてもいいきっかけだと思います。

ました。」「歌詞に込めたい思いというのは2年間活動をともにしたためか、他の人と共通する点が多いなと思った。それを曲にして演奏することで一体感を感じられた。」という回答があり、これまでの塩原ゼミでの活動を認識しなおすきっかけになったようである。一体感を感じることが出来た人もいたようなので、音楽コミュニケーションが共感を生み出しえたと言えるのではないだろうか。

「完成した塩ゼミソングを歌い続けたいですか」、という問いに対して、7割が「はい」、1割が「いいえ」、残りの2割は「歌わず聞いていたい」と答えた。「いいえ」と答えた人は、恥ずかしいという思いが強いようである。出来上がった塩ゼミソングが、今後卒業して各地で活躍するであろう塩原ゼミ7期生や、今後のゼミ生にどのように響いていくのかはまだ分からない。しかし、今回の「創る」という行為の範囲内においては、全参加者が能動的にコミュニティを見つめるきっかけになったことは事実だろう。コミュニティの持つ共同主観的な領域を再認識し、共感性を高めることができた。「音楽の力」の一端だと信じたい。

3-3. ワークショップの反省

今回のワークショップは、私個人の試行錯誤で進めた。今後、他のコミュニティでテーマソングを創る機会があれば、考慮すべきことを3点書き留めておきたい。①言語化によって排除される想いの拾い上げ②言葉に音をつける作業の明確化③ファシリテート能力ついてである。

まず1つ目に関してだが、今回のワークショップでは、初めにテーマに関するキーワードを出し、それを元に歌詞を創るという作業を行った。しかしテーマ、例えば「多文化共生」という言葉から連想されるキーワードは非常に幅広く、多岐にわたっていたが、歌詞として成立させるにはそこからいくつかをピックアップしなくてはならない。どうしても、歌詞には盛り込めないキーワードが出てくるのだ。その優先順位のつけかたは、個人の感覚や字数の問題等に左右されると思うが、排除されてしまう思いを拾い上げることが必要だと思った。また、この「語り合う」という作業を目的とするのであれば、音楽でなくてはならない理由がないという点にも違和感がある。音楽を行為と捉えた場合、歌詞を創るという作業も音楽と捉えているため今回の議論に問題はないのだが、この作業だけを抜き出すならば音楽とは違う方法で代用が聞くと考えられる。音楽作りだからこそ、思いを包括出来る仕掛け作りを検討すべきだと思う。

2つ目の言葉に音をつける作業の明確化である。今回、私はキーワードに音をつける作業をイメージしていたのだが、ゼミ員が想像以上に音楽を演奏する技術に長けていたため、私の想定とは違う形の素材が出来上がった。音の素材を創るのではなく、「曲を

創る」という方向に参加者の目的がシフトしてしまった。結果的には、曲として成立したため問題はないのだが、もし演奏する技術に長けている人が1人もいなかった場合は全然違う結果になっていただろう。作業の **How To** を明確にし、誰しもが音をつけることができる仕組みを考えるべきである。

3つ目は2つ目と重なる部分があるが、ワークショップのファシリテート能力が結果を大きく左右することを学んだ。「何を目的とするのか」「どういう態度で臨んで欲しいか」「どういう成果物を目標としているか」など、もう少し細かくスタンスを提示しても良かったと思っている。自由にする部分と、ある程度制約する部分のバランスをうまくとってワークショップを構築すべきだと思う。

3-4. 塩ゼミソング

最後に、今回のワークショップで完成した塩ゼミソングの完成版の歌詞である。塩原ゼミ7期生だからこそ出来たこの作品がみんなの心に残ることを願うばかりである。

【塩ゼミソング】

さあ、輪になって話そう

さあ、輪になって話そう

今日も 鶴見で 5時 みんなでトランプ

今日は 山田家に 10時 肉焼過ぎた oh BBQ

今日は 磯子に 9時 高校説明会

今日は 磯子に 9時 りんちゃんが来ない Oh NEBOU

距離が分からないや それが先生の狙いなんや

ある日 塩原さん 調整さん 飲み代は先生が精算

しかし二次会せず解散 だって先生はお父さん

ピンチのときは萬來舎 行かなきゃ

ぼくの口からは言えませんね

今日も鶴見で 8時 夕飯どうする

今日も おぼん de ごはん でもちょっと飽きる たまにはラケル

違いを理解したくて何度も
君と対話した
君の気持ちを想像したこちんだの涙

それでも現実は厳しくて
でも共に生きていきたい
あの時そうおもったんだ

君と僕との境界線を越えてあいに行くよ
そこがぼくらの居場所になるで

さあ、輪になって話そう
さあ 輪になって話そう
さあ 輪になって話そう
さあ 輪になって話そう

第四章. さいごに

私は22年間、音楽に囲まれて生きてきた。楽しかった思い出ばかりではない。音楽は時折私に孤独を感じさせた。音楽に限らないと思うが、身体知は自分自身との戦いを意味するのだ。自分は何故みんなと違って1人で楽器を弾いてばかりいるのか幾度となく自分に問いかけ続け、何度も辞めてしまいたいと思ったことがある。「正しい音楽」を追い求めることに嫌気がさしていたのだろう。しかし、ずっと続けてきたのは、楽器を通して「他者と通じ合う」経験を何度もしてきたからである。仲間と共に音楽を奏で、達成感を共有すること。ステージの上で繰り広げられる音楽に心が揺れ動かされること。自身の中にある、かけがえのない時間を他者と共有すること。その魅力に取り付かれてここまで生きてきた。「正しい音楽」を追い求めるためというよりも、他者と時間を共有するために音楽を続けてきたのだ。これは音楽が好きと言えるのだろうかと思ふときもあった。しかし、音楽を行為と捉え直すことで自信を持って言うことができる。「正しい音楽」の追求ではなくても、私は音楽をしてきた。私は音楽が好きである、と。

また、音楽に苦手意識を持つ人も、クラシック音楽を一部の特権化された人々のものだと考えて嫌厭する人も、ジャニーズのドームコンサートに足繁く通う人も、皆が音楽をすることができる。誰でも携わることができる「行為」として音楽を捉えると、一気

に〈音楽の力〉の可能性は広がり、多種多様なコミュニティに影響を及ぼす可能性がみえてきた。音楽は、決して孤独なものではない。〈音楽の力〉は、多種多様な人々を繋ぎ、人間関係を深めることが出来る素晴らしい力なのである。

参考文献

- 山田真一,2008年,『エル・システマー音楽で貧困を救う南米ベネズエラの社会政策』
クリストファー・スモール/野澤豊一、西島千尋訳,2011年,『ミュージッキング—音楽は行為である』水声社。
中村美亜,2013年,『音楽をひらく—アート・ケア・文化のトリロジー』水声社。
ブルーノ・ネトル/細川周平訳,1989年,『世界音楽の時代』勁草書房。第一版第一刷発行。
堀公俊,2008『ワークショップ入門』日本経済新聞出版社
中野民夫,2001『ワークショップ』岩波新書
山田俊之,2007『体がすべて楽器です！ザ・ボディーパーカッション ケチャ風お茶づけ』音楽之友社

参考 Web ページ

- 「明日へ」復興支援ソングのご案内 <http://www.nhk.or.jp/ashita/themesong/> (2015年12月22日アクセス)
中村桃子,2002年,第2回年次大会基調講演
学会誌第3号『言語とジェンダー研究』
http://www.gender.jp/journal/no3/No3_1.html#A00 (2015年12月29日アクセス)